鹿児島女子短期大学「紀要」
一九八四年版十一～十九頁

「大和物語」一四九段の文章

伊佐山　潤子

一、

「大和物語」の文章については、はやくに桜井祐三氏が、

他の平安初期の諸作品に比して、頗る平易で、文脈の理解し難い様な箇所は至って少い。何等の抑揚も緩急もない。淡々たる文章を以て終止し粉飾を施さない素朴な、古雅な味ひはあるが、伊勢に見る緊密な簡勁な中に溢るゝばかりの抒情味を湛へた潤ひや調べの高さを見出すことはかなり困難である。

と述べておられる。[1] 近くでは、渡辺実氏が、

「伊勢物語」の文体の高さ、それに比して「大和物語」の文体の低さ、それはおそらく衆目の睹るところであろう。

と言われた。[2] これらに代表されるような、「伊勢物語」に比べて単純・素朴な文章というのが、おそらく「大和物語」に対する大方の見方であろうと思われる。

しかし、これをそのまま肯定してよいものであろうか。たしかに、「大和物語」の文章には稚拙さが見られ、洗練されているとは言い難い面もあるが、それをもってただちに「伊勢物語」より一段劣っていると言ってしまうのには問題がありはしないか。

そもそも、内容的に、歌物語的色彩の強い前半部と説話的色彩の強い後半部という、かなり異質な二部から成っている「大和物語」においては、文章の上にも前半・後半で違いのあることがすでに指摘されており、[3] 内部にこのような断絶のあるものをすぐに「大和物語」の文章とひとくくりにしてしまうのは早計にすぎる。

また、糸井通浩氏の言われる、各章段は、語りの「発生から成長への、種々の段階における形態を、それ個々の段階において筆録されているものである」との観点[4]に立てば、まずいろいろな特徴をもつそれぞれの章段があって、それらの集合によって「大和物語」というものが成立しているわけであるから、やはり、「大和物語」の全体を見る前に、ひとつひとつの章段の文章を詳しく見て行くことが必要となるであろう。

すなわち、他の作品と比較するより先に、「大和物語」の文章自体についてもっと解明すべきであり、そのためには、個々の章段の文章の特質を明らかにするところから始めなくてはならないと考えるのである。

そこで、ここでは試みに、一四九段の文章がどのようなものであるのかを調べてみて、今後「大和物語」の文章を考えて行く上での問題点を探ってみ

たいと思う。

二、

さて、「大和物語」の一四九段に関しては、古くから多くの人々がさまざまな言及をしてきている。「伊勢物語」の二三段、筒井筒の話と同じ内容を持っているところから、「伊勢物語」「大和物語」の特質を比較するための好材料となっていることが、その一因であろう。が、意外なことに、この段の文章についての言及は、これまでそれほど多くはなされていない。それらも、たとえば、清水好子氏の、「具体的な事柄が増し合理的な説明も加へられてゐる」ということば[5]に代表されるように、純然たる文章というよりはその内容に注目して、「伊勢物語」との比較の上に、「くどくどと説明しすぎている[6]」とか、「説明的・合理的・具体的・細部明確という効果につながる記述を本段に指摘することは容易である[7]」とかいった論述がほとんどである。文学的にどう読むかという問題があまりにも前面に出て扱われすぎたために、文章の面からこの段を眺めることが忘れられてしまっていたからであろうか。

その中で、阪倉篤義氏が、会話文の使用状況から「伊勢物語」より物語化が進んでいると述べられた[8]ほかは、阿部俊子氏が次のように言われたことに注目される。

> 著しく文章がみぢかくなり、追想詠歎の「けり」で結ぶ場合が多く、強調して述べる場合には、「なむ……連体形」をつかひ、細かに具体的にいき〳〵と描出しようといふ時には、たたみかけて、短文で現在形で結びつつ文章を重ねてゐる。その意味では生き〳〵と語りかける叙法をとってゐるといへよう。即ち強調すべきは念をおし、つよく語りかけつつ全体を追想的に情感をこめて語るといふ形を十分駆使してをり、その意味で歌の情趣によりかかるのみでなく、歌を物語る作品としても一つのリズムをもつてまとまり得てゐる……[9]

この阿部氏の記述を基礎に置いた上で、一四九段にはなおいくつかの文章上の特徴、問題点が見られる。以下、文連接の仕方・「なむ――ける」・文末語などの面から考察して行く。

岩波書店　日本古典文学大系「大和物語」一四九段

昔大和の国葛城の郡にすむ男女ありけり。この女かほ容貌いときよらなり。としごろおもひかはしてすむに、この女いとわろくなりにければ、思ひわづらひて、かぎりなくおもひながら妻をまうけてけり。このいまのめは富みたる女になむありける。ことにおもはねど、行けばいみじういたはり、身の装束もいときよらにせさせけり。かくにぎわゝしきところにならひて、きたれば、この女いとわろげにてゐて、かくほかに歩けどさらに妬げにもみえずなどあれば、いとあはれとおもひけり。心ちにはかぎりなく妬く心憂しとおもふを忍ぶるになむありける。留まりなむと思う夜も、なを「往ね」といひければ、わがかく歩きするを妬まで、異業するにやあらむ、さるわざせずばうらむることもありなんなど、心のうちにおもひけり。さていでていくとみえて、前栽の中に隠れて男や来るとみれば、端にいでゐて、月のいといみじうおもしろきに、頭かい梳りなどしてをり。夜更くるまで

寝ず、いといたううちなげきてながめければ、人待つなめりとみるに、使ふ人の前なりけるにいひける、

15　風吹けばおきつしらなみたつた山よはにや君がひとり越ゆらむ

とよみければ、わがうへをおもふなりけりとおもふに、いとかなしうなりぬ。この今のめの家は立田山こえて行くみちになむありける。かくてなを見をりければ、この女うち泣きて臥して、金椀に水をいれて胸になむ据へたりける。「あやし、いかにするにかあらむ」とてなをみる。さればこの

20　水熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。又水を入る。みるにいとかなしくて走りいでて、「いかなる心ちし給へば、かくはしたまふぞ」といひてかき抱きてなむ寝にける。かくてほかへもさらに行かでつとゐにけり。かくて月日おほく経ておもひけるやう、「つれなき顔なれど、女のおもふことといいみじきことなりけるを、かく行かぬを、いかに思ふらむ」と思ひいでて、

25　ありし女のがりいきたりけり。久しく行かざりければ、つゝましくてたてりけり。さてかいまめば、我にはよくてみえしかど、いとあやしき様なる衣をきて、大櫛を面櫛にさしかけてをりて、手づから飯盛りをりけり。いといみじとおもひて、来にけるまゝに、いかずなりにけり。この男は王なりけり。

三。

初めに文連接の仕方から見てみよう。

平安時代の文学作品の文連接法については、山口仲美氏に詳細な論稿がある。[10] いま、それにならって二二文から成る一四九段をみると、次のような結果が得られた。山口氏の出された「大和物語」の数値に比べて、接続詞型と指示詞型の値が高いこと、特に、接続詞型が非常に多く用いられていることが特徴的である。

	連接を示す要素のないもの	連接を示す要素のあるもの		
		接続詞型	指示詞型	重ね型
一四九段	42.9%（9例）	33.3%（7例）	23.8%（5例）	0%（0例）
「大和物語」（注）	65%	16%	17%	2%

（注）山口氏論文中のグラフからよみとったおよその数値

「大和物語」も含めて、歌物語一般に接続詞型・指示詞型が多いことについて、山口氏は、「接続詞型を多用して文をすすめるのは、作者が、できるだけ文脈を解説し、説明しようとする表現態度であることを示」し、指示詞型を用いるのは、「文と文とが切れることを好まず、逆に鎖のようにつながり合いながら展開し、同時に親近感をもたせる様な文体を好んだため」で、「いずれも、歌物語が、口で語られていた『歌語り』を基盤として発生したことから生じた特色、つまり、もともとは『耳で聞く』文学であった特色を示している」と分析しておられるが、一四九段の場合も、この点から説明が

つくのであろうか。

これを明らかにするために、接続詞型七例中三例を占める「かくて」、指示詞型五例中四例を占める「この」の使われ方をみてみる。

まず、「かくて」は、第11文、第17文、第18文の文頭に用いられている。

① かくてなを見をりければ、この女うち泣きて臥して……（17行目）
② かくてほかへもさらに行かでつとゐにけり。（22行目）
③ かくて月日おほく経ておもひけるやう……（22行目）

ここで注意したいのは、この三例ともが、すぐ前の文の内容を明確に受けるものではないということである。①の「かくて」は、直前の文ではなく、もうひとつ前の文の「わがうへをおもふなりけりとおもふに、いとかなしうなりぬ」を受けている。つまり、話の流れからいえば、「いとかなしうなりぬ。なを見をりければ……」と続いて行くところであるが、間に解説の文「この今のめの家は立田山こえて行くみちになむありける」が入りこんできているために流れが中断されている。その切れ目を補って話をさらに続けて行く役目を負ったことばとして、「かくて」が使われているのである。従って、厳密に言えば、この「かくて」は前文と後続文とを正しく結んでいるわけではない。②では、もとの妻への愛情を再確認させられたある夜のできごとを、③では、男が新しい妻を設けてからもとの妻のもとへ戻って行くまでのいきさつすべてを、それぞれ「かくて」と受けている。すなわち、これらの「かくて」は、単純に前文と後続文とをつないでいるのではなく、それまで述べてきたことがらを大まかに受けて話を進めて行くためのきっかけになるような役割を果たしているのである。[11]

これは、山口氏の言われる、「文脈を解説し、説明しようとする表現態度」の現れた文連接とは少し違っている。接続詞の中でも、「されど」「されば」のように因果関係を表すものなどは、文脈を誤りなく辿るための役割を持っていると言えるだろうが、「かくて」のような、漠然とそれまでの内容を受ける接続詞の場合は、論理的にきちんと前を受けて後へ続けているわけではないから、必ずしも解説的・説明的とは言えないのではなかろうか。一四九段の「かくて」は、話しことばの特徴から来た、正確に文脈を辿るための手がかりと言うよりは、大まかに前の話を受けて先へ続ける時に筆者が好んで、あるいは筆ぐせとして用いているように思われる。[12]

次に、「この」について。文頭の「この」は次の四例である。

④ この女かほ容貌いときよらなり。（1行目）
⑤ このいまめは富みたる女になむありける。（3行目）
⑥ この今のめの家は立田山こえて行くみちになむありける。（17行目）
⑦ この男は王なりけり。（28行目）

④⑤については、それぞれ、「男女ありけり」の「女」、「妻をまうけてけり」の「妻」のように、直前の文に受けるものがあるが、⑥⑦の場合は、直前の文には「この」が受けるものはない。⑦は直前文「いかずなりにけり」の男を受けるとも考えられるが、一四九段全体を通して話題になった男を受けているとした方が自然であり、⑥で「この」が受けているのは、かなり前の「妻をまうけてけり」の「妻」である。一四九段の「この」には、直前の

文に受ける語がある場合とない場合の、二通りがあるようだ。

ちなみに、文頭以外に見られる「この」は、

⑧ としごろおもひかはしてすむに、この女いとわろくなりにければ…（2行目）

⑨ かくにぎわゝしきところにならひて、きたれば、この女いとわろげにてゐて……（5行目）

⑩ かくてなを見をりければ、この女うち泣きて臥して……（17行目）

⑪ さればこの水熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。（19行目）

の四例である。このうち、⑧だけは直前文の「女」を受けているが、⑨⑩⑪については受ける語句が直前の文にはない。

このように見てくると、一四九段で用いられている「この」は、山口氏の言われる、文を切らず「鎖のように」つなげて行く文連接のためのものではなく、もっと別の働きをしているように思われる。すなわち、わざわざ「この」と述べなくてもいい場合（たとえば⑥⑧）、普通なら「その」または他の語を用いるような場合（たとえば⑨⑪）にも、ことさら「この」が使われている。さらに、もとからの妻を表す時はすべて「この女」、新しい妻は「この今の妻」、男を表すのも「この男」というように、登場人物にはいつも「この」が用いられていることにも注目される。例外は「ありし女のがりいきたりけり（25行目）」であるが、これは、もとの妻と新しい妻という二者の対立がくずれたあとの話で、新しい妻の方はすでに主要な人物ではなくなっていることをはっきり示すために「ありし女」と言ったものと考えられるので、話の中心となる人物として述べる場合にはすべて「この」が用いられていると言っていいだろう。

指示語について、井手至氏は、「話手が、近称で指示するか、中称で指示するかの相違は、要するに、話手が、先行表現を身近なものとして受け取るか、取らぬかの問題」であると言われ[13]、それを受けて、神谷かをる氏が、「前の脈絡と必ずしも論理的に関係せず、近しいと語り手の感じたもの、近しく描きたい物事に」対して「コ・コノ・コレ」など「コ系」の語を用いる場合があり、それによってことがらが「大写しにされる」効果があると述べておられる[14]。

これを考え合わせると、一四九段の「この」は、論理的な文脈上のつながりよりも、心理的に読者に近いものと感じさせることの方に重点を置いた使われ方がされているようである。これは、山口氏が「親近感をもたせる様な文体」と呼ばれたものにあたると思われるが、文連接という観点からは、語りを基盤とした文章の性質とは異っているものと言えよう。

以上、「かくて」や「この」の使われ方を見てくると、一四九段では、本来は、前に話した内容を確実につみ重ねて行って、耳で聞いても間違いなく理解してもらうための文連絡上の工夫であったものが、前出のことばを受けて後へ正しく続けるという点ではかなり働きがあいまいになっていることがわかる。これは、「大和物語」がもともと歌語りを基盤にしているとは言っても、すでに本来の語り、話しことばの姿からは隔ったものであることを思わせる。

四、

続いて「なむ――ける」をみてみよう。一四九段には次の五例がある。

⑫　このいまのめは富みたる女になむありける。（3行目）

⑬　心ちにはかぎりなく妬く心憂しとおもふを忍ぶるになむありける。（7行目）

⑭　この今のめの家は立田山こえて行くみちになむありける。（17行目）

⑮　かくてなを見をりければ、この女うち泣きて臥して、金椀に水をいれて胸になむ据へたりける。（17行目）

⑯　……「いかなる心ちし給へば、かくはしたまふぞ」といひてかき抱きてなむ寝にける。（21行目）

「なむ――ける」についても、岡村和江氏[15]、阪倉篤義氏[16]をはじめ、これまでにいろいろ論じられており、たとえば小林岩彦氏は、「『なむ――ける』は、伝承された過去の事柄を、そのまま、主観を交えないで、回想的に、淡い詠嘆を帯びた口調で聞き手に語りかける機能をもつもの」と説明しておられる[17]。しかし、一四九段の「なむ――ける」は、これといくらか異った意味あいで使われているようである。

まず、⑫⑬⑭と⑮⑯とでは、同じ「なむ――ける」でもその性質を多少異にしていると思われる。

すなわち、⑫⑬⑭は話の展開上必ずなくてはならないという文ではない。⑫は、もとの妻が「いとわろく」なったのに対して、「かくにぎわゝしきところ」と述べているところから、特に「富みたる」などと言わなくても新しい妻の経済的な豊かさは充分に理解できる。⑬では、あとの方で胸にあてた金椀の水が湯になったという話が出てくるので、表面は何気なくふるまいながら内心非常に悩み苦しんでいる女の気持ちはよく察せられる。にもかかわらず、それを先走って、ここでこのように言ってしまうのは、かえって興ざめであるとも言えよう。同様に⑭も、「風吹けば」の歌を多少なりとも知っている者にとっては余計な注釈であり、たとえ初めてこの歌に接する者であっても、これまでの話と歌だけで、男が立田山を越えて新しい妻の所へ通っているという状況は間違いなく把握できる。このように、⑫⑬⑭は極端に言えば、余分な解説、むしろなくもがなの文なのである。

このあたりが、「くどくど説明しすぎて」おり、「伊勢物語」より「一段劣っている」と言われる[18]原因なのであろう。これを筆者の合理的精神の現れとして、「伊勢物語」より一歩新しい方向へ進み出しているものとする見方もあるようだが[19]、特に⑭などは、歌を詠むことに続いて妻が泣き臥し、胸にあてた金椀の水が湯になってしまったという、いわばこの段のクライマックスともいうべき部分の話の流れを完全に中断させていることは否定できない。

ただここで注意したいのは、こういう、いわばあとからとってつけたような説明、解説の部分に、皆、「なむ――ける」という表現が用いられていることである。これは、小林氏の言われる「伝承された事柄を、そのまま、主観を交えないで」述べるものとは違って、逆に、「なむ――ける」が持っている語り口調の性質を利用して、読者が知らない、わからないであろうと筆者の考えることがらを説明するための、一種のパターン化された表現として使われているように思われるのである。

さらに、⑮⑯の場合は、すでに語りの口調などということからは離れ、解

説のための表現とも異って、単にことがらの強調のための表現として用いられている。この段の中で最も高まりを見せる場面で、これらは現れてくる。のぞき見をしていると、妻が金椀に水を入れている。一体どうするのだろうと、主人公の男も読者も不思議に思う。そこで「胸になむ据へたりける」という具合に、「なむ――ける」による強調は効果的に用いられているのである。

このように見てくると、一四九段の「なむ――ける」には、一方では本来の語り口調としてのあり方を生かして、話の途中に説明を放り込む時に用いる場合と、一方ではもはや文章語として、単にことがらを強調する場合と、二通りの使われ方をしていることがわかる。そしてこのことは、前章で述べたのと同じように、この段の文章が、語りの性質を残し、あるいはそれを利用しながらも、読む文章として書かれていることのひとつの現れと思われる。

五、

次に文末語について。その前にまず、この段の構成について考えてみる。一般に、「大和物語」の一四九段は、「風吹けば」の歌を中心とする前半部と後日譚の後半部の、二部から成っていると言われているようである。[20] しかしこれは、「伊勢物語」の二三段が、(1)「筒井筒」の歌を中心とする幼時の恋の部分、(2)「風吹けば」の歌の部分、(3)後日譚の部分の、三部から成ることを基準にし、「古今集」などとの関係において言われていることであり、いま一旦それらと切り離して一四九段だけを読めば、この段は三部構成になっていると思われる。すなわち、

(a) 新しい妻のもとへ通うようになったのにもとの妻の態度が少しも変わらず、男がそれを不信に思う部分「昔大和の国葛城の郡に……（1行目）」

(b) 妻は浮気をしているのではないかと疑う男が、ある日妻の本当の気持ちを知る部分「さていでていくとみえて……（10行目）」

(c) 新しい女の所へ行ってのぞき見をし、すっかり幻滅してしまう部分「かくて月日おほく経て……（22行目）」

の三部である。

(b)(c)の切れ目は、従来の二部構成の考えの場合と同じであるから問題ないとして、(a)と(b)との切れ目のところには多少疑問を持たれるかもしれない。しかし、初めは態度の変わらぬもとの妻を「あはれ」と思っていた男が、次第に妻を疑うようになったことと、ある時妻の本心を確かめるためにのぞき見をする場面との間には、時間的にズレがある。また、表現の上からも、「……うらむることもありなんなど、心のうちにおもひけり」と「さていでていくとみえて……」の間には断絶、あるいは飛躍がある。この話を読む時、我々はほとんど無意識のうちにそれを補っているわけであるが、ここには普通ならば、「そこで妻が自分を裏切っているのかどうか確かめようと思って、ある日のぞき見をすることにした。さて……」というようなことばがあっていいところだからである。以上のような理由で、一四九段は、内容の上で三部構成になっていると考えられる。そしてこのことは、各文末表現の上にも確実に反映している。

一四九段、二二文の文末語を並べると、次のようになる。

(a)　けり、なり、けり、（ける）、けり、けり、（ける）、けり、
(b)　をり、ぬ、（ける）、ける、みつ、つ、入る、ける、けり、
(c)　けり、けり、けり、けり、けり、

（）に入れたのは、「なむ――ける」の章で述べた解説の文の文末である。これは余計な放り込みの文と考えて、いまそれを除いてみると、内容からみた三部構成に合わせて、各文末語もある型を持っていることがわかる。文末音のみに注目してみると、(a)の部分と(b)の第一文、(b)の最終文と(c)部分のイ音にはさまれる形で、(b)の中心部分にウ音が並んでいる。すなわち、文末音が、イ音――ウ音――イ音と、はっきり三部に分かれているのである。

「……けり。……けり。……けり。……」と、イ音の文末を連ねて淡々と進められる話の中にあって、最も高揚する場面に、動詞の現在形（みる・入る）や、係り結びによる連体形（ける）、「つ・ぬ」といった、ウ音で終わる語が効果的に用いられているといえよう。筆者が意図的に文末をこのようにそろえたのかどうかは、また、別の問題であるが、結果的に、こういった文末表現が物語の起伏を明確にし、盛り上がりを助長していることは間違いない。構成にのっとった文末用語の使用状況は、語りことばというよりは書きことばとしての工夫の現れと言えるものではなかろうか。

「大和物語」の文末用語については、「けり」と「けり」以外の語という観点から、小林岩彦氏が、「けり」以外の文末が多く用いられているのは、他に比べて長文の、変化や調子の盛り上がりのある、説話としておもしろい章段で、文章としてもすぐれている、と述べておられるが、[21] かっちりとパターン化された文末語の使用状況と、その効果という点で、一四九段はひとつの典型をなすものと思われる。

六、

以上、「大和物語」一四九段についてみてきた。一四九段の文章は、従来言われているように、もともとは歌語りを基盤としていると考えられるが、それをそのまま文字で記したものではなく、どちらかといえば、むしろ書きことばの方に傾いた性格のものであると思われる。必ずしも正確に文脈に合ったものではない文連接の仕方や、語り口調の語句といわれる「なむ――ける」がそれより一歩進んだ用いられ方をしていることなどから、それはうかがえる。そして、内容に応じた三部構成で文末表現に特徴があり、阪倉篤義氏の言われるように、[22] 会話文や心中言を多く用いることによって物語的色合を強め、起伏のはっきりした読ませる文章としての工夫も見られるものである。

これを敷衍すれば、高橋正治氏の言われる、「物語の場で語られてゐたやうな材料を歌語りの経験のある人が、語った時の方法を生かしながら、文字に写していった」ものであり、「大和物語」は、「正に歌語りから、文字文芸に移る過渡的な様相をそのまま保持した作品」であるということになるのであろう。[23] しかし、「過渡的な様相」とは言っても一様ではなく、おそらく章段ごとに異った姿を呈しているであろうことは予想され、一四九段の場合も、そのひとつの姿としてとらえなければならないことは言うまでもない。他の章段については、またいろいろな角度から検討すべきである。その際、ここで取り上げた、文連接の仕方、「なむ――ける」、文末語などの問題は、

ある章段が「歌語りから文字文芸」に至る段階のどこに位置するものであるかを判断するための手がかりになるのではないかと思われる。

ただ、これらの手がかりとなるであろうことがら自体にも、いくつかの問題がないわけではない。たとえば、文末語に関して、前記小林氏のほか、梅原恭則氏も、「伊勢物語」に「『けり』に代表される物語の叙述の部分と、そのほかの語による事件描写の部分との二重構造――あるいは、その上に和歌を認めて三重構造――が認められる」と述べておられるのであるが、[24]こういった構造、表現方法がどこから来たのかといったことは、興味ある問題である。が、すべて今後の課題としたい。

（一九八三・八・二九稿）

注

(1) 桜井祐三、「大和物語の文章と構想」（解釈と鑑賞、昭一三・四）

(2) 渡辺実、「伊勢物語・大和物語の文体」（鑑賞日本古典文学5・『伊勢物語・大和物語』、角川書店、昭五〇）

(3) 会話度を扱った阪倉篤義、「物語の文章―会話文による考察」（京都大学教養部、人文6、昭三四）、時を表す語を扱った松尾拾、「大和物語文体試論」（日本大学国語国文学会、語文24、昭四一）ほか。

(4) 糸井通浩、「初期物語の文章二・三の問題―『語り』の志向するもの」（古代文学研究4、昭五四）

(5) 清水好子、「物語の文体」（国語国文、昭二四・九）

(6) 片桐洋一、鑑賞日本古典文学5・『伊勢物語・大和物語』（角川書店、昭五〇）

(7) 柿本奨、「事実と物語―大和物語の記述」（国語と国文学、昭五二・十二）

(8) 前掲（注3）論文

(9) 阿部俊子、『歌物語とその周辺』（風間書房、昭四四）

(10) 山口仲美、「平安朝文章史研究の一視点―文連接法をめぐって」（国語学98、昭四九）なお、文連接については、岡村和江、「仮名文」（岩波講座日本語10『文体』、昭五二）も参照されたい。

(11) この点については、次の「なむ―ける」のところで述べる。

(12) 「大和物語」の「かくて」については、大木恵美子、「大和物語における『かくて』の考察」（二松学舎大学、人文論叢9、昭五一）、前掲（注4）糸井氏論文などに言及がある。参照されたい。

(13) 井手至、「文脈指示語と文章」（国語国文、昭二七・九）

(14) 神谷かをる、「物語文章史と指示語」（大阪大学、語文39、昭五六）

(15) 宮坂（岡村）和江、「係結の表現価値」（国語と国文学、昭二七・二）

(16) 阪倉篤義、「歌物語の文章―『なむ』の係り結びをめぐって」（国語国文、昭二八・六）

(17) 小林岩彦、「伊勢物語・大和物語の文体」（中京大学文学部紀要4の1、昭四四）

(18) 片桐洋一、前掲（注6）論文

(19) 柿本奨、前掲（注7）論文、大岡信、「『伊勢』と『大和』ひとつの読み方」（国文学、昭五四・一）など。

(20) 『日本古典文学大系、大和物語』補注一三六ほか。

(21) 小林岩彦、前掲（注17）論文

(22) 前掲（注3）論文

(23) 高橋正治、「大和物語の位相」（国語と国文学、昭三一・九）

(24) 梅原恭則、「伊勢物語の文章について、その続き（一）」（東洋13の6、昭五一）